

シャボン玉がとぶ日

—新たな困難、そして、新たな挑戦—



【陸前高田の学校支援の新しい形】

陸前高田の学校支援は、福祉医療機構の助成を受けて、10月から3月までは新しい支援の形を整えることとなりました。一つは、これまで関東から毎週末支援隊を入れて学校訪問をし、ニーズを把握してきましたが、それを現地スタッフを雇い入れて行うことにいたしました。当初は、関東からの派遣も考えておりましたが、学校と地域の既存のネットワークを大切にしつつ、その上で、新たな関係を築いていくことを検討した結果、



モビリアの避難所の運営にかかわっておられた2人の方（鈴木さん（写真右）・美穂さん（写真左））にお願いすることになりました。おふたりは、陸前高田の復興を地域ベースで考えるための「陸前たがだ八起プロジェクト」のメンバーとして活動する一方で、その合間をぬって Ed.ベンチャーの現地スタッフとして活動していただけたとのことでした。アルバイト代としての

支払い予定は、月額約10万円です。

9月30日は美穂さんを伴っての活動、いわゆるOJTによる学校訪問でしたが、地元出身の彼女がいることで、どの学校でも地域の話になり、これまでの訪問ではなかなか知り得なかったことをたくさん知ることができました。さらに、広田小学校では物品の支援依頼があり、早速対応していただくことになりました。このような現地スタッフによる活動が、今後、どのようなことに繋がっていくのか、そのことと、私たちがどのような関係を結んでいくのか、そこが問われているように思います。

【学校が直面している課題①】※②は次号に掲載します

久しぶりに訪れた学校は、表面的には「学校」としての機能を取り戻しているように見えました。しかし、いざお話を聞きすると、そこにはいくつかの課題があることもわかりました。陸前高田の場合、震災直後から半年は、いわゆる「災害ユートピア」という状況にあった感じですが、仮設住宅の入居、親の再雇用の状況によって、家庭による「差」が少しずつ生まれ広がる中で、その影響が子どもたちにも少しずつ出ているようです。気仙小学校では、Ed.ベンチャー発行の支援通信を読んでいたようで、「うちでも、万石浦の子どもたちと似たような状況が出始めています」と切り出されました。そして、そのお話を詳しく聞いていくと「仮設住宅の大きさ」が大きな課題であるように思えました。

陸前高田の地域では、まだ多くの家庭が「大家族」の形態をとって生活しているようです。ですから、祖父母世代2人・親世代2人・子ども3人となると7人です。この規模の家族に提供されている仮設住宅が4畳半3部屋に台所・トイレ・風呂です。これでは狭いわけです。田舎ですから、これまで十分大きな家で育ってきた子どもが押し込められる空間としては、やはり狭すぎます。そこで、多くの家族は、祖父母世代とわかれて2件の仮設住宅を申し込むことを選択しました。これで広さの問題は解決しましたが、

浮上してきたのが子育て問題です。これまで親世代が働きに出ていても、祖父母が家にいたので、子どもの生活は祖父母と一緒に成り立っていたのですが、住居がわかれたことで子どもたちのことに手がまわらなくなった。その結果、「荒れる」「飛び出す」等のが学校で見られるようになったと言います。また、広田小中学校では、子どもたちがふざけて遊んでいる勢いで窓ガラスを割るという、いままであまり起きなかった出来事も起きているとのことでした。生活空間が狭くなり、子どもの発散場所が限られている状況では、「仕方のないことなんです」というお話でした。

それで思い出したのは、万石浦中学校避難所に最後までいたある家族のことです。この家族は、当たった仮設住宅を何回か手放して、6人家族が隣同士で2つの仮設に住めるように応募し続けたと言います。それがようやくかなったのが9月。避難所から少しづつ人がいなくなるなかで、心細かったり、「わがままだ」と言われないかと不安に思ったりの日々だったろうと推測できます。これまでに近い生活環境を確保することが、いかに難しいことかを思い知らされます。

【万石浦子ども支援】

10月1・2日は、万石浦での子ども支援でした。前回の支援から1ヶ月が経過しています。果たして子どもたちは集まるのか…、もちろん集まらなければ、それぞれ居場所を見つけて地域で過ごせるようになっていっているのだからいいことで、支援も早めに切り上げることになるか…等々、いろいろ想像しながらの現地入りでした。しかし、予想を超えて朝8時過ぎに、最初の子どもが「僕、1番!!!」と元気に顔を見せると、次から次へと集まって、9時にはほほいつもの顔ぶれが揃いました。仮設住宅が少し遠くなったので、迎えに行く約束をしていた小2の男の子は、迎えの車が着いたときには既に準備を終えて待っていたそうです。その表情から、みんな、楽しみにしていたことが、よくわかりました。

ただ、「楽しみにしていた」と言っても、ライオン隊はライオン隊です。集会所の中でボール投げをして叱られ、友達を仲間はずれにしたことで野球遊びが中断になったり、叱られてふてくされたりと、さまざまなトラブルがありました。それでも、それらを乗り越えて、みんなで遊べる時間が随分長くなったと感じました。特に興味深かったのは、2日目の午前に準備されていた「大きなシャボン玉を作ろう」の外遊びです。大学生による企画で、事前の実験もしたとのことでしたが、いざ初めてみると、いくらやってもシャボン玉はできません。大学生はもちろんのこと、大人たちも「これはまずい」とばかりに、あれやこれやの試行錯誤を始めます。「飽きてしまったら、收拾がつかなくなる」・・・これがその時の支援者に共通していた予想ではないかと思いますが、不思議と子どもたちは、できないことに不満を言うのではなく、「何とかシャボ



ン玉をつくろう」という方向に動いていったのです。原液を入れたり、糊をいれたり、水をいれたりと試行錯誤です。結局、最後までシャボン玉はうまくできませんでしたが、それでも、子どもも大人も一緒になって「成功」を目指して取り組んだ時間になりました。

今回の支援のもう一つの特徴は、これまで参加してきた子どもたちの傍には、「友達も一緒に来たけどいい？」というように、初めて参加する子どもが加わっての活動になったということです。2日目、小4の女の子の友達の子という関係にある、小1の男の子が参加しました。特別支援学級に在籍しているとのことで、最初は確かに集団に入ることが怖いようで、かなりぐずっている感じでした。連れてきたお母さんも心配して一緒に参加しました。1時間ほどして、少し疲れた様子をその子が見せた時、「帰ろうか？」とたずねたお母さんに、その子は横に首を何回も振りました。「疲れたでしょ？」というお母さんの問いかけにも、首を振っています。そこで、私たちは、「お母さん、おいていいですよ。大丈夫ですから」と話し、お母さんには家に戻ってもらいました。その後、彼は一緒にシャボン玉をやり、おにぎりを作ってお昼を食べ、午後の外遊びを見学に行き…というように、最後まで元気に参加していきました。落ち着いたくないトラブルの多いライオン隊の学校なのですが、そこには弱い子を排除しない、そんな暖かさがあることを感じさせる光景でした。



今回の万石浦での支援は、地域にできた仮設の集会所「万石浦サポートセンター」で行われました。もともと宿泊施設ではないのですが、管理している市の担当課のご厚意で、支援隊は集会所に泊めていただけることになりました。そのお返しというわけではありませんが、集会所に必要な物品を支援したりしています。今回は、万石浦中学校の避難所が10月2日で閉鎖になるとのことで、そこにひかれていた畳を運んで、集会所に畳をひく作業を行いました。畳がひかれたことで、子どもたちもゴロゴロし安くなり、これから寒さが一層心配される仮設の集会所も、少しは暖かく過ごせるのではないかと思います。

【福島富岡町学校再開支援】

10月5日に、福島県三春町の工場を借りて再開した富岡町の小中学校を訪れました。保健室用の医薬品棚やソファベッドを搬入しました。元工場だった校舎は、内装も壁紙が貼られ、パーティションで区切られた教室も見違えるようにきれいになっていました。それぞれの教室では授業が進められ、授業のない先生方は、忙しそうに職員室などの準備を進めていました。小学校2校、中学校2校、幼稚園が同じ場所を使いながらも、それぞれが独立して運営されるため、施設全体をどう使うかの工夫が難しそうでした。

校長先生方にお話を聞くと、全国に散らばった町民たちの気持ちを、学校が再開されたことで、離れていても気持ちを結びつける役割を果たしたいとおっしゃっていました。「地域の象徴」としての学校の存在がある限り、「地域」はある・・・という発想に、避難を余儀なくされた人々のつらさをいろいろと考えさせられました。

【お願い!!】感想をお寄せください。

第3回報告会 (10月13日19時～21時 富士見文化会館) を行うにあたり、報告会に参加いただけない方の声もお聞きしながら、今後の支援の方向性を検討していきたいと考えております。支援通信をお読みになられての感想などを是非お寄せください。郵送・FAX・メールいずれでも結構です。感想は次号で紹介させていただきます。

【支援隊活動記録 9月15日～10月5日】

■陸前高田学校支援

○9月29日～30日(第23回) 現地スタッフ雇用と委託事業依頼、OJTによる学校訪問(小友小学校・小友中学校・広田小学校・広田中学校・気仙小学校)
□支援隊メンバー: 清水睦美(東京理科大学)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、
□支援物資(地元業者経由): 紙15箱・朱肉(広田中学校)、電話時計1個(気仙小学校)、CDラジカセ6台(小友小学校)

■石巻市万石浦子ども支援

○10月1日～2日(第15回) 万石浦ライオン学校の10月活動
□支援隊メンバー: 柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、福島良彦(引地台中学校)、内藤順子・吉間里依(大野原小学校)、今井美里・甘利悠貴・大林沙紀・古浦新司(東京理科大学学生)
□物資提供: 万石サポートセンター(電気カーペット3台、スチール製24人用靴箱2台)

■富岡町学校再開支援

○10月5日(第3回) 保健室使用物資提供
□支援隊メンバー 家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、柿本隆夫(引地台中学校)
□物資提供: 薬品庫(大和小学校提供)、ソファベッド・パーティション(購入)
■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む) 9/15～10/5
大和小学校、櫻井千夏(歯科衛生士)、手塚文雄、倉島千恵、権田和子(元中学校教諭)、福島良彦(引地台中学校)

※「タカギケイコ」にて9/28に振込がありました。お心当たりの方は事務局までご連絡ください。

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Ed.ベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

